文化

80年目の京大人文研

綾なす知 5

「社会との距離」に存在意義問う

分かりやすさと深い専門性 開かれた知の発信へ両立

11月中旬の夕、京都大人文科学研究所本館のセミナー室に、老若男女の市民が続々と入っていった。この日、人文研アカデミーの連続講座「ラカンを読む」の初日。用意していたフランス語のテキストはあっという間になくなった。40人以上詰めかけて手狭になったため、会場を隣室へ移した。

専門家でも難解といわれる、精神科医で哲学者ジャック・ラカンの論集「エクリ」を、原文のフランス語で読む。主催者ですら「無謀な企画」という冒険的な試みだ。「こんなに集まるとは」と、講師の立木康介・人文研准教授（精神分析）は驚く。聴講した山科区の元エンジニアの男性（65）は「かなり難しかったけど、刺激になる。人文研らしい」と話した。

1990年代、大学改革で「開かれた大学」が叫ばれ、社会への発信が求められた。その流れを受け、従来の公開講座を刷新した「人文研アカデミー」が2005年に誕生。共同研究の成果を披露するセミナーやシンポジウムに加え、中高生向けの夏休み企画や、ヨガ教室など体験型の講座も増やした。

人文研ではアカデミーが発足する前からも、市民向けの催しは夏期公開講座など年に数回開かれてきた。林原美術館長の熊倉功夫氏も人文研の助手時代、夏期講座で講師を務めた。「最前列のおじさんがお酒を飲みながら聞いていた。熱心な人文研ファンがいた」。学際的な研究で培った言葉は、多様な市民へ語りかける言葉として生かされた。

学術ジャーナリズムが華やかだった50～70年代、研究者は成果をもとに一般書や専門書を次々と発行。東京からやってくる編集者との交流の中で、本や雑誌連載が次々と生まれた。元人文研助手の社会学者加藤秀俊氏は「当時は本の出版が一つの目標。共同研究が始まる時には、出版も決まっていた」と振り返る。

熊倉氏は「学者の商業出版に対する抵抗が根強い中、（日本部で教授を務めた）林屋辰三郎さんは、いくつもシリーズを企画していた。特に図版を活用して、学問を市民の間に広げようとしていた。市民社会と接点を持たないと、象牙の塔になってしまう」と話す。

近年、所員のメディア露出は減り、それが「人文研は衰えたのでは」という見方にもつながっている。だが加藤氏は「学術評論など批評する層が衰退したのであり、評価される側が衰退したわけではない」と反論する。

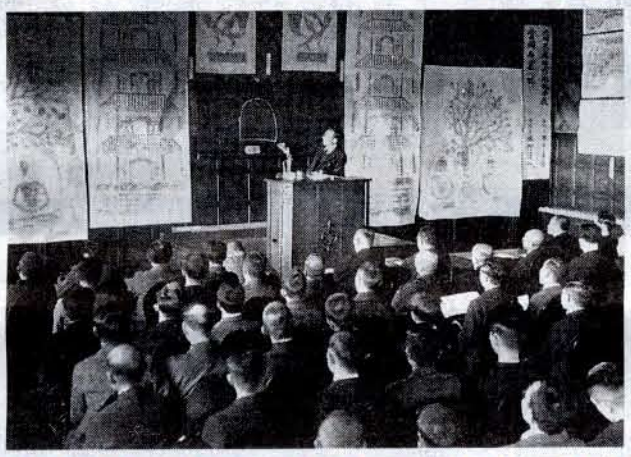
「ラカン」の企画者の一人、大浦康介教授（文学理論）は言う。「ラカン」は「歯ごたえのある」学問の本分と面白さを伝える一つの試みだった。

また、アカデミーの名物企画「レクチャーコンサート」の講師を務める岡田暁生准教授は「規模を大きくしすぎると、普通の講演会になる。人文研の持ち味の親密な共同体性から醸成される空気を大事にしたい」と語る。

分かりやすさ、目に見える効果を求める時流の中、それに応えつつ、人文研らしい発信を探る。人文研と社会との距離感の模索は、人文研とは何か、学問とは何か、それらの存在そのものの問いにつながっている。

毎週水曜掲載。

人文研アカデミーの連続講座「ラカンを読む」。難しい原書に挑戦する市民ら（京都市左京区・京都大人文研本館）



1938年に催された水野清一氏による雲岡石窟に関する一般向け講演＝京都大人文研提供

図書館や博物館の司書を対象に、漢籍の分類やデータ入力を手ほどきする「漢籍担当職員講習会」（京都市左京区・京都大人文研分館）

□■メモ

戦前の旧人文研、東方文化学院時代から、市民・学生向けの講座を開講。1954年には従来の「常設人文科学講座」を夏期講座に衣替えし、11月の開所記念講演、退官記念講演会を加えて公開事業の柱とした。旧東方部では72年から漢籍担当職員講習会を文部省と共催（現在は単独開催）。外部機関との連携企画も増え、人文研全体では現在、年間約30回の講座や講演を開いている。